

# ムラーヒダとモンゴル

岩 村 忍

(1)

ヨーロッパで *assassin* として知られ、このことばの語源になり、多くの奇怪な説話、伝承の種になったイスラムの異端派がある。これはシーアの一派 *Ismā'īliyya* のうち特に *Nizāriyya* の分派 *Mulāḥida* (*Malāḥida* ともいう、異端者の意味) であった。このムラーヒダが他のイスマーイル派と異なるところはその教義や神学によるというよりは、むしろその政治組織あるいは教団組織にある。もっともイスラム学の立場からいえば、この奇怪な教団の教義はイスマーイル派と異なるところがあったと考えられるが、ムラーヒダが13世紀にモンゴル人によって討伐され、その書庫が破壊<sup>1)</sup>し尽されたので、いまでは知る由もない。

ムラーヒダの教祖は自ら *Imām* と称した *Ḥasan-i-Ṣabbāḥ* である。ムラーヒダの歴史はかれが 483 (1090-91) 年に有名なエルブルズ山脈中の *Alamūt* 山寨<sup>2)</sup> を奪った時に始まる。かれはこの険峻な山寨を修築して本拠とし、難攻不落の山城から四方に勢力を拡張し、多くの他の山城を奪いあるいは修築した。かれは強力な敵に対しては得意の暗殺手段をもちいて服従させた。

ムラーヒダという名称が示すように、この教団は他のほとんどすべてのイスラム教派、教団から異端と見なされ、かつその暗殺という陰険な政治手段は憎悪の対象となっていた。13～14世紀にわたり、西アジアや十字軍を通してヨーロッパにおいて暗殺者団はその奇怪な政治的手段によってきわめて有名になり、いろいろな説話や噂が流布された結果、モンゴル人によるムラーヒダ討滅後もこの話はながく残り、*Marco Polo* や *Odorico* に見える形の伝承になったものである。

ムラーヒダに関する西アジアや西洋の資料は、古くから研究され、多くの著書や論文があり、特にホジソンの近著に詳しいので、ここに贅説する必要はない。中国の資料も夙に西洋の学者の注意するところとなり、*Rémusat*, *Pauthier* が早くも西使記の記事

に注目し、さらに Bretschneider<sup>3)</sup> に至っては西使記の詳細な校註を試みた上に、元史に散見する関係記事をも摘出して比較している。ただブレットシュナイダーと雖も見逃している元史の記事は他にもあり、またかれはフラグ・ハーン西征に関する中国側史料の考証に止まり、ムラーヒダとモンゴル人のペルシア遠征との関係を考えているわけではない。それでここで再びムラーヒダに関する主として中国側の資料を吟味するとともに、モンゴル人のペルシア征服の発端とムラーヒダとの関係について考えてみたい。

(2)

ムラーヒダが中国側史料に最初に現われるのは元史、太祖紀、十七年壬午の条においてである。

十七年壬午の春、皇子拖雷 Tului 徒思 Ṭūs, 匿察兀兒 Nishāpūr 等の城に克ちて還り、木剌夷 Mulāhida 国を経て大いにこれを掠め、溯撈蘭河を渡り、也里 Herāt 等の城に克ち、遂に帝に会し、兵を合せて、塔里寒 Tāliqān<sup>4)</sup> 寨を攻めてこれを抜く。

上の元史の記事に対応する記述は元朝秘史、親征録にも見える。

秘史（那珂通世訳）

拖雷は亦嚕 Herāt, 亦薛不兒 Nishāpūr 等の城どもを取りて、昔思田 Sistān の城を破りて回りて下馬して来て、成吉思合罕に合しぬ。

親征録

上（チンギス・ハーン）暑気まさに隆なるを以て、使を遣して招き四太子（拖雷）を速かに還らしむ。（拖雷）因って木剌夷国を経て大いにこれを掠め、溯撈蘭河を渡り、野里 Herāt 等の城に克つ。上まさに塔里寒寨を攻めんとす。朝覲畢り、兵を併せてこれを攻む。

トゥルイのホラーサーン地方（当時この地方はメルヴ、ニーシャープール、ヘラートの三地区にわかれていた）征服はペルシア史家の書に詳しい。トゥルイはまずホラーサーン最大の都市メルヴを破壊し、ついで南西に進んでニーシャープールを占領し、そこから東方に転じてヘラートを攻めたが、ヘラート攻略以前にニーシャープールの東南、ペルシアの Kūhistān を通過した。その目的はこの地方に散在するムラーヒダの山城（Kūhistān とはいふまでもなく山嶽地方という意味である）を滅却するためであった。トゥルイの軍は南西からヘラートに侵入したものと考えられる。従って那珂博士<sup>5)</sup> のいわれる如く溯撈蘭は Harī Rūd 河にちがいない。南西からヘラートに接近する途

中には記載に値いするほどの河川はハリー・ルード以外にはないからである。

中国側の史料に関する限り、以上に挙げたトゥルイの西征についての記事がムラーヒダとの最初の接触になっている。しかし以上の秘史、親征録、元史の記事では拖雷のムラーヒダ討伐の理由や動機等は全くわからない。これだけではムラーヒダ討伐は、単にチングス・ハーン西征の一エピソードと見るより外はない。しかしペルシア史料によるとモンゴルとムラーヒダとの接触、交渉はもうすこし溯ることができる。ジュワイニー<sup>6)</sup>の記すところでは、Ḥasan III (Jalāl ad-Dīn, 1210-21) はチングスがトルキスタンを出発すると同時に使者を派遣して服従を申し入れている。チングスがイルティシュ河畔を出発したのは1219年の秋であるから、ハサンの使者の派遣は1219年秋からハサンの死んだ1221年までの間であり、時間的にもっとしぼれば、それはジェベ、スブタイの先鋒軍、ついでトゥルイの本隊のホラーサーン侵入すなわち1220年秋までの間になるが、おそらくチングスが使者を引見した時期はイルティシュ滞留中のことであつたと考えられる。なぜならハサンはモンゴル兵がホラーサーンに属する **Balkh** を攻める以前に再び使者を送って服従を誓っているからである<sup>7)</sup>。だがこれらの使者がいかに扱われたかはわからない。ただモンゴル軍が1220年にはすでにホラーサーンに姿を現わしていた事実は、ハサンの使者が使命を果しえなかったことを語るものであろう。

以上のように中国側、ペルシア側両方の史料によって、モンゴルとムラーヒダの接触はすでにチングスの西征と同時に始まり、チングスの東帰まで続いていたことが知られる。

つぎにオゴタイの時代になると、その元年(1229年)にムラーヒダ(木羅夷)国主がカラコルムに来たことが元史、本紀、巻二に見えている。ハサン三世はすでに1221年に死し、Muḥammad III (1221-1255年)の時代になった。ムハンマド三世が位についた時は9才<sup>8)</sup>だったというから、1229年には17才であつた。かれがモンゴリアに至つたという記事はペルシア史料には見えないようである。しかしオゴタイの即位に際して来朝したということは充分に考えられるところである。オゴタイは即位の始めは金の征服を専らにし、ついで1235年にはロシア征服に主力を割くこととなり、西アジア方面への遠征は大規模なものは起さず、時々少数の兵力を以て侵寇を試みる程度に止めた。従つてムラーヒダとの関係も悪化せず、平常の関係を保っていたものであろう。しかし表面上はいかにあつたらうと、モンゴルとムラーヒダとの間の関係は決して良好なものではなかつた。ムラーヒダはすでにトゥルイのホラーサーン侵入の時にかなりの損害を蒙り、クーヒスターンにあつたその多くの山寨は相当の破壊を蒙つた。オゴタイ時代には

両者の関係は小康を保っていたとはいえ、モンゴルの部隊はしばしばホラーサーン地方に出没し、決して安心がならない状態にあった。

(3)

オゴタイは1241年に死に、トラキナの監国時代を過ぎてグユクが即位し、ついでモンゲが1251年に即位した。

モンゲは即位の翌年、早くもムラーヒダ討伐の軍を起こした。ムラーヒダ討伐は普通フラグの西征の一環と考えられているが、実はそうではない。というのはモンゲが即位後最初のクリルタイを催して全般的な軍事計画を立案したのは1253年で、この時にフラグの遠征が決定されたものである。ところがムラーヒダ攻撃はこのクリルタイが開催される前年、1252年には事実上はじまっていたのである。ラシード・アッディーン<sup>9)</sup>によればこのころイランにはモンゴルの指揮官として *Baijū* が駐在していたが、1251年のモンゲ推戴のクリルタイに出席した(後述)バイジュは西方において討伐を必要とする敵国としてムラーヒダとバグダードのハリファを挙げて、モンゲに進言した。モンゲが大規模な西アジア遠征を決心したのは、このバイジュの進言によるものと思われる。モンゲはクリルタイで正式に西征を決定する以前1252年にまずバイジュへの援軍としてナイマン族出身の將軍 *Kitbuqa*<sup>10)</sup>をクーヒスターンに派遣してムラーヒダ山城の攻略を命じた。このような状態であったのだから、モンゲの西征計画は1252年には事実上はじまっていたわけである。キトブハ派遣については元史、憲宗紀、二年の条に“乞都不花を遣わし、末來(ムラーヒダ)の吉兒都怯 *Girdkūh* 寨を攻む”と見えていて、ペルシア史料と一致しているが、記事はこれだけでペルシア史料の詳細なおよばない。

さてモンゲがクリルタイを俟つことなく早急にキトブハを派遣した原因はどこにあったろうか。もちろんその一つはグユク死後三年間にわたってハガーンは空位になり、その結果四方の経略も停顿せざるをえなかったのが、モンゲは即位するや否やまずただちに最も急を要するムラーヒダ討伐のため、とりあえずキトブハを急派する必要があったためであろう。

しかしながらキトブハの派遣をかくも急いだ理由としては、バイジュが西方ではバグダードのハリファ朝、東方ではムラーヒダという強敵に挟まれている事態を一刻も早く解決することになったものと思われる。上述のような理由のほかにキトブハ急派の直接原因となったのは、カズヴィーン市の大法官 (*qāḍī l-quḍāt*) であった *Shams ad-Dīn*<sup>11)</sup> という者の言であった。いうまでもなくカズヴィーンはムラーヒダの本拠に近いところ

であるから、この人は事情に詳しくないにちがいない。推測するならば、あるいはバイジュの命を受けてムラーヒダの実情を告げるためにモンゲの宮廷に至ったのかも知れない。とにかくこのシャムス・アッディーンはモンゲに謁見したが、その時かれはムスリム風の長衣の下に鎧を纏っていた。そしてその理由として、ムラーヒダ暗殺者の脅威を蒙っているのです、いつでもこうして鎧をつけている必要がある、とモンゲに告げた。モンゴルの宮廷に出るのに鎧をきる必要はないのにそうしたことは、たぶん故国におけるムラーヒダの脅威をモンゲに納得させたかったからであろう。シャムス・アッディーンがムラーヒダの暴威について語ったところが、モンゲに早急な討伐を決意せしめる重大な原因になったことは疑えない。

1252年にこうしてキトブハに一軍を率いさせて先遣し、ついで翌1253年のクリルタイで正式に西域遠征を議決した。元史、憲宗紀には二年壬子（1252年）に“旭烈兀西域、素丹（スルターン）諸国を征す”と見え、1252年のこととしているが、これはもちろん誤りでペルシア史料によって1253年のこととしなければならない。

シャムス・アッディーンがムラーヒダ暗殺団についてモンゲに語ったことが後々までモンゲの心に刻まれていたことは、有名なギョーム・ド・ルブルクの紀行にも見えている。フランスのルイ聖王の使節ギョーム・ド・ルブルクは1254年カラコルムに至ってモンゲに謁見しているが、かれの復命書<sup>12)</sup>によれば、カラコルムにおいてかれの一行は厳重な訊問に会った。その理由は40人に及ぶムラーヒダ暗殺者がモンゲ・ハーン暗殺のためにカラコルムに潜入したという噂が当時このモンゴルの本拠に伝えられたからだとして記されている。ムラーヒダが暗殺者団を遠くモンゴリアまで派遣したかどうかは別として、すくなくともムラーヒダは常にモンゴルの動静に鋭い注意を払い、モンゴルについてかなり正確な知識を持っていたことは事実である。その証拠の一つは、13世紀のヨーロッパにおけるモンゴルに関する知識の大半はイスマール派（ムラーヒダ）によって伝えられたものであるという事実である。モンゴルについてのヨーロッパ中世の記録として有名な *Chronica majora* の著者 *Matthaeus Parisiensis* (*Matthew Paris*)<sup>13)</sup> は1238年にフランス、イギリスを訪れたムラーヒダの使節からモンゴルに関しての知識を多く仰いでいる。この事実によってもムラーヒダは恐るべき敵としてのモンゴルについて常に情報を蒐集していたことがわかる。だからかりに暗殺を目的とする潜入ではなかったにせよ、スパイを派遣していたことは充分に考えられる。こう考えればオゴタイの時にムラーヒダの国主が来朝したというのも、即位の奉賀を口実にモンゴルの動静を探りにきたものかも知れない。

以上に述べたところから二つの点があきらかになったと思う。その第一は、ムラーヒダとモンゴルとの接触、交渉はチンギスの西域親征の当初に起こり、そのごも何等かの形で絶えず継続されてきたという点である。第二は、モンゲの西域征伐計画、その結果としてのフラグの遠征の直接の目的の一つはムラーヒダ討伐にあったということである。

(4)

フラグのムラーヒダ討伐についてはもちろんペルシア史料が第一である。中国史料については早くからブレットシュナイダーによって詳細な研究が行われ、元史、郭侃伝および西使記が訳註されている。従ってここでムラーヒダ関係のこれらの中国側史料を再び解説する必要はあるまい。ただ前項に見えるバイジュ、キトブハについての史料を一瞥するに止めたい。

キトブハは元史、憲宗紀の二年と七年の両条に見えるが、ともにムラーヒダ討伐に関してである。両条とも全く同一で<sup>14)</sup>、ただ異なるところは七年の条には“これを平ぐ”という句が加えられているのみである。この両条の文章は同じだが重出ではない。憲宗二年(1252年)にキトブハはギルドクーを囲んだが攻略に失敗した。ラシード・アッディーン<sup>15)</sup>によるとこの将軍はナイマン族の出身である。1252年に12,000の兵を率いてムラーヒダの地域である Rūdbār, Gilān, Kūhistān 等に侵入したが、ギルドクーの奪取には失敗した。フラグの軍が到着するに及んでキトブハを加えたモンゴル軍はこの険峻な山城に猛攻を加えた。この度の攻撃に郭侃が参加して奮戦したことは元史、本伝に見えている。こうしてギルドクーは1257年ついに陥落し、破壊されつくした。キトブハはそのご西アジアに転戦し、ルリスターンを荒掠してバグダードに向い、フラグの本隊に合流してその攻略にも参加したが、後にエジプトのマムルーク軍と戦い、捕われて殺された<sup>16)</sup>。

以上はキトブハの活動の概略であるが、このナイマン族出身の将軍や中国人郭侃は元史に見えているが、かれらはいわば部将に過ぎなかった。モンゴルの西アジア征服に重大な役目を演じたのはバイジュであった。この将軍は西アジア、ヨーロッパでは有名な将軍で Baiju noyan, Baachu noin 等<sup>17)</sup>と記されている。バイジュは1241年西方のモンゴルの総指揮官 Chormaghan の死後、代って西アジア駐在モンゴル軍を指揮することになり、フラグの遠征に際しては、ハリフ朝征討に大きな役割を演じた人であるが、元史には伝わらない。ただ一箇所憲宗紀、元年(1251年)の条に見えているのみで

ある。

元年辛亥夏六月、西方の諸王別兒哥、脱合帖木兒、東方の諸王也古、脱忽、亦孫哥、按只帶、塔察兒、別里古帶、西方の諸大将班里赤等、東方の諸大将也速不花等また大いに闊帖兀阿蘭の地に会し、共に帝を推して皇帝の位に鞏難において即かむ。

上に見える西方の諸大将班里赤こそバイジュにちがいない。Baijū はアルメニア史家 Kirakos は Bachu noin, ルブルクは Baachu と記している。Batu を班禿と元史に書いてあるところを見ると、班里赤 Panlichi を Baichū, Baijū に読ませても無理ではない。“西方諸大将”ということから見て、憲宗即位の時にこれに当る他の將軍は考えられない。さきに触れた Kirakos には Bachu khorchi とも記されているので箭筒士だったものと思われる。

フラグの西征に従った中国人としては郭侃の伝が元史に見えるのみで他にはなく、中国人によって書かれたフラグ遠征の資料としては常德の西使記しか見当らぬ。しかしフラグの西征に従った中国人が独り郭侃や常德にとどまらないことは明かである。おそらく数多かったことと思われる。そういう一人に高鳴がある。元史、卷百六十の伝を見ると、高鳴は真定の人でフラグは西征中にその名を聞き、礼を厚くして招いた。高鳴は西域に赴き、フラグに西征策二十余条を献じ、容れられたという。後に礼部尚書に陞った人である。

(筆者は京大人文科学研究所教授)

## 註

- 1) Mulāhida の討伐については 'Alā'-ad-Dīn 'Aṭā-Malik-Juvainī, Ta'rikh-i-Jahān-Gushāi の終章に詳しい。Rashid-ad-Dīn も多くこれによったといわれる。Juvainī の完訳には J. A. Boyle, *The History of the World Conqueror*, 2 vols., 1958 がある。最近 M. C. Hodgson, *The Order of Assassins*, Gravenhage, 1955 という専著が出てニザール派の歴史はかなり明かにされたが、ムラーヒダの根本資料が消滅した今日、教義の詳細は依然不詳である。ただし Hammer-Purgstall (*Geschichte der Assassinen*, 1818) やその他の多くのヨーロッパの学者の“暗殺者団”に対する偏見に囚われた解釈とちがって、ホジソンはもっと史学的な立場に立って解釈していることは傾聴に値する。
- 2) Alamūt はイランの Qazvin からカスピ海南岸に近い Khurramābād への途中のエルブルズ山脈中にある。この山城の廢墟は Freya Stark (*The Valleys of the Assassins*, 1934) に詳細に描かれている。筆者も1960年カズヴィーンからアラムートに向ったが、出水で到着できなかった。

ムラーヒダとモンゴル

- 3) E. Bretschneider, *Mediaeval Researches*, 2 vols., London 1910. 4) 岩村  
忍, 塔里寒考, 『東洋研究』15巻, 1号。 5) 那珂通世, 校正増注元親征録, 122頁。  
6) *The History of the World Conqueror* by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini, tra-  
nsl. by J. A. Boyle, 2 vols., Manchester 1958, p. 703. 7) Juvaini, p. 703 ;  
Boyle, p. 223. 8) Juvaini, p. 703. 9) *Histoire des Mongols de la*  
*Perse par Raschid-eldin traduite par M. Quatremère*, Paris 1836 (以下 Raschid-eldin と  
略記), p. 121. 10) Raschid-eldin, p. 139. 11) Raschid-eldin, p.  
121. 12) *The Journey of William of Rubruck*, transl. by W. W. Rockhill,  
London 1900, pp. 118, 222. 13) Rockhill, p. xiv. 14) 元史, 卷  
三, 憲宗紀二年には“乞都不花を遣して未来(ムラーヒダ)の吉兒都怯(ギルドクー)寨を攻  
めしむ”と見え, 同七年には“乞都不花等未来の吉兒都怯寨を攻めて, これを平く”とある。  
15) Raschid-eldin, p. 139. 16) Raschid-eldin, p. 257, 359. 17) P.  
Pelliot, *Les Mongols et la Papauté*, Paris 1923, pp. 109, 110 ; F. W. Cleaves, *The*  
*Mongolian Names and Terms in the History of the Archers*, *Harvard Journal of*  
*Asiatic Studies*, vol. 12, 1949, p. 411-413.